

岩手県 紫波町 紫波中央駅前地区

観光・交流
コンパクトシティ
交通利便性向上
経済活性化
健康・医療
子育て支援
防災・減災
その他

■ 基本情報

計画期間：平成 21 年度～平成 25 年度

面積：21.2ha

交付対象事業費：1,945.1 百万円

市町村人口（地区人口）：33,686 人

■ 地区概要

本地区では、町が所有し長年未利用となっている公共公益施設用地を有効利用するために、公民連携手法を活用した事業「オガールプロジェクト」を展開し、身の丈に合った公共施設の整備と民間施設等の立地による経済開発の総合開発事業を展開し、活性化を図った。

■ 目標

J R 紫波中央駅前に魅力ある行政・公益施設ゾーンを創出し、町民の利便向上と交流を促進する。

- ・ 公共施設等を整備し、生活利便性の向上を図る。
- ・ 町の情報発信の拠点を整備し、交流人口の拡大を図る。
- ・ 良好な居住環境の形成を図る。

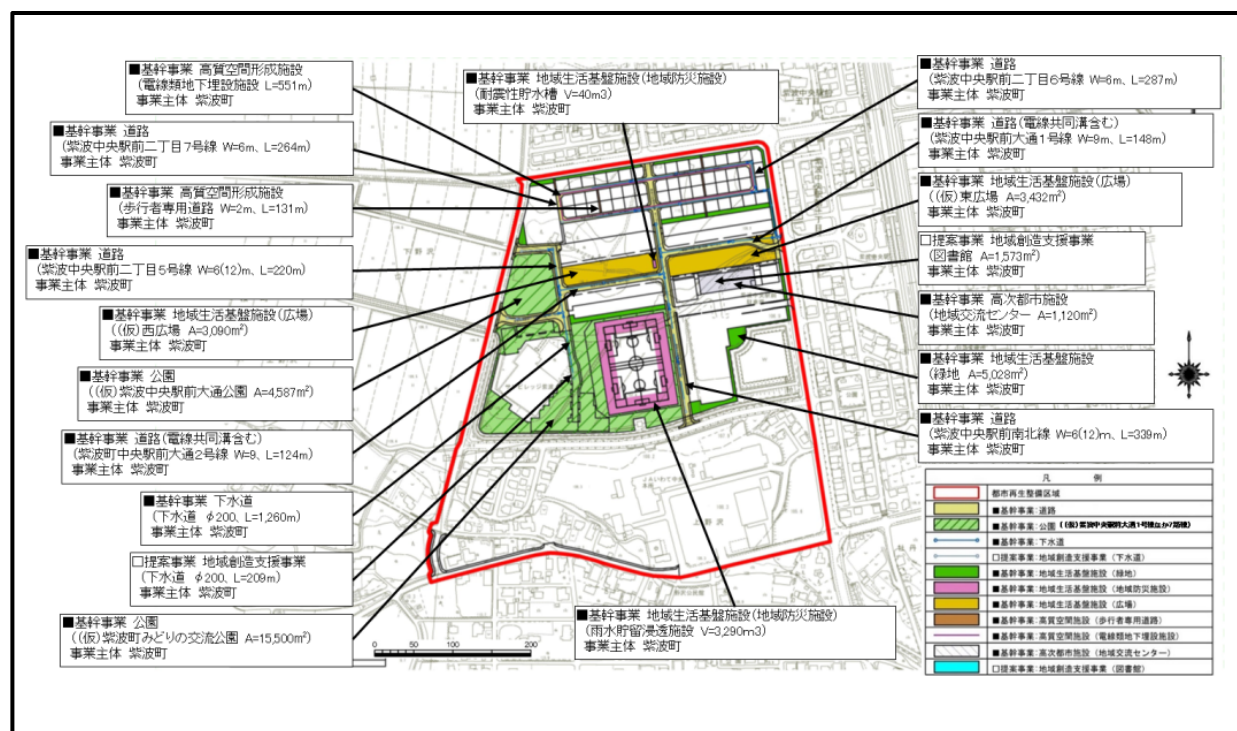
■ 主な事業

基幹事業：【高次都市施設】地域交流センター（291 百万円）

【高質空間形成施設】電線類地下埋設施設（96 百万円）

【地域生活基盤施設】広場（250 百万円）

提案事業：【地域創造支援事業】図書館（408 百万円）

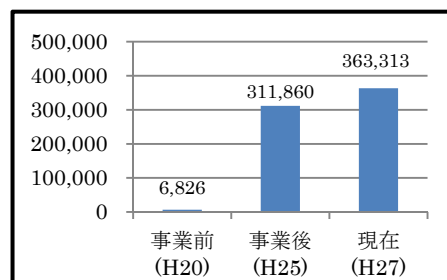


■まちづくりの実施効果

定量的な効果

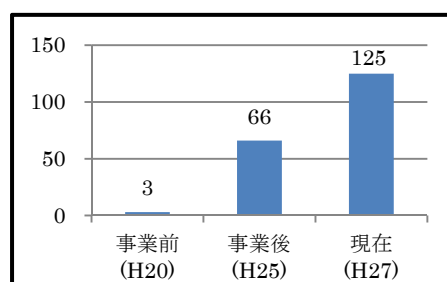
●地域交流センターと図書館の利用者数の増加

徒歩でも車でもアクセスが容易で周囲に人の集まる施設があり、多くの人に利用されやすい場所に当該施設がある。また利用しやすく魅力的な設定料金や規模・設備とし、蔵書や読書環境の充実を図り閉館時間を遅くするなど、利用者の利便性と快適性に配慮した施設づくりと運営を行っていること等により、多くの人に活用され、町外からの利用者も増加した。



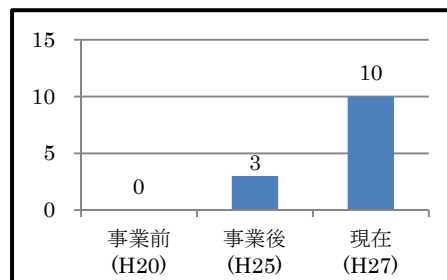
●地区のイベント数の増加

駅直近のため鉄道による広範囲からの集客が可能なうえ、車ででの来訪も容易で、周囲に人の集まる施設もあり、主催者が利用しやすく参加者を集めやすい場所に当該施設がある。また適度な規模や低廉な料金、整った設備など施設や設備が魅力的であること、更には、複数のホームページや施設主催の定期的な催しを活用し、積極的に情報を発信することにより、多くのイベントが開催され、町外からの参加者も増加した。



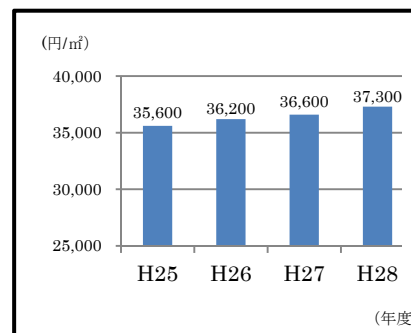
●住宅地の販売画地数の増加

地区内の施設が順次完成し、開発地区を含むエリアの全容が徐々に姿を現すにつれ、まちの賑わいが増して販売促進効果をもたらしたことにより、住宅地の販売が増加した。また町独自のエネルギー消費を抑えた一定基準を満たす住宅「紫波型エコハウス」の認知度が、高まってきたことも増加の要因である。



定性的な効果

- ・平成 24 年度には、地区から 100m に位置する住宅地に地価調査の基準地が設けられ、平成 25 年度から平成 28 年度まで 4 年連続上昇した。(右図参照)
- ・地区内住宅地において県内初となる景観法に基づく景観協定が締結され、隣接する岩手県住宅供給公社が整備した住宅地とともに優良な居住環境の住宅地が形成、維持されることとなった。



■効果を継続させるための今後の取組み等

- ・本地区内に、新たに安心して子育てできる環境を創出する官民複合施設と民設民営保育園が整備され、当該エリアの魅力をより高め、賑わいを地域全体に広く波及させる。
- ・本地区内の住宅地の販売画地数の更なる増加を目指し、紫波型エコハウスの普及促進を図るため、建築費削減の研究や「モデルハウス」において相談・紹介・宿泊体験等の普及啓発活動を行っていく。
- ・公民連携手法で整備した、文化・交流・情報発信機能を持つ官民複合施設（オガールプラザ）等の施設が地域との交流や市民協働の拠点として活用されるように、運営の改善と普及啓発を目指す。

■地区 PR 欄

オガールプロジェクトの「オガール」は、「成長」を意味する方言「おがる」とフランス語で「駅」を意味する「ガール（gare）」を掛け合わせたものである。本地区を「紫波の未来を創造する出発駅」として、紫波町が持続的に成長していくように、という願いが込められている。

本地区のエリア全体の価値を高めるために、まちづくりの有識者によるオガール・デザイン会議を組織し、統一感のある美しい街並みを創出すべく「デザインガイドライン」を策定するとともに、市場調査と町民の意向調査を行い、建物と公共空間の一体的な活用を目指して都市再生整備計画を作成し事業はスタートした。

情報交流館（地域交流センター・図書館）及び民間施設からなる官民複合施設「オガールプラザ」の整備には、町が第三セクターのオガール紫波㈱と協定を締結し、オガールプラザ㈱が民間事業として建設した建物の公共部分を完成後に買い取るスキームとした。

本地区の中央を東西に貫き、道路・広場・公園で構成される「緑の大通り」や「オガールプラザ」の機能やデザインには、多様な市民（町民・事業者・学生など）の想いを生かすために、平成 21・22 年度に「緑の大通り担い手づくりワークショップ」を開催した。市民の経験や知恵、感性を生かしながら構想を練り上げるとともに、本地区への愛着を持ってもらうことで継続的なまちづくり活動へと結びつけた。

オガールプラザ内には、子育て応援センター「しわっせ」が整備され、地域との交流・子育て環境の充実や市民協働の拠点として機能し始め、市民参加型まちづくりの促進に寄与している。

民間の事業として、岩手県フットボールセンターの利用者数は、年間 4.3 万人、オガール紫波㈱が経営する産直「紫波マルシェ」は、会員が農家を中心に 306 名を数え、町の基幹産業である農業における所得向上の一助となっている。また、民間事業用地に民間事業者がホテルやバレーボール専用体育館、飲食店等が入居する民間複合施設を開業し、オガールプラザとこの民間複合施設の 2 つの事業棟で約 170 名の雇用が創出された。これらの事業効果が現われ、住宅地価が本地区の近傍地点で 4 年連続上昇している。

今後は、オガールエリアと町内各地域をつなぎ、オガールの賑わいを町内全域に広げていくことができるよう「まち」も「人」も育てていく街「オガール」の発展に取り組んでいく。



▲H26 全景



▲緑の大通り（オガール東広場）

緑の大通りは、紫波町のシンボリックな通りとして、事業棟と一体となった集客施設。



▲子育て応援センターしわっせ

子育て世代の親子等を対象に、交流の場を提供するとともに子育てに関する事業を推進するための施設。



▲紫波マルシェ（オガールプラザ内産直）

売場面積は県内最大級を誇り、紫波町の名産品があふれている。店内には食堂やカフェを併設している。